

卒業生に贈る言葉

校庭の梅の花も見ごろを過ぎ、日を追うごとに春の訪れを感じる季節となりました。今年度の卒業式は、保護者の方二名迄及び、全員ではありませんが、ご来賓の方々並びに、在校生の参加が可能となりました。お忙しい中お越しいただきました、ご来賓の皆様、保護者の皆様、在校生と共に、第四十九回卒業証書授与式がこの様に挙行できる事、嬉しく感じております。

第四十九期生のみなさん、ご卒業おめでとうございます。

ただ今巣立っていく三年生、百三十五名一人ひとりに卒業証書を授

与いたしました。保護者の皆様におかれましても、日々慈しみ愛情を注いでこられたお子様の卒業に、言葉では言い表せない感動を胸に抱いておられることと推察いたします。三年前の入学式はコロナ禍で二ヶ月遅れの六月十五日でした。その時「夏服での入学式となり、皆さんのこれからの人生で様々な事があるでしょうが、おそらく一生涯忘れることが出来ない入学式になることでしょう。」そして「互いを認め合い皆さん一人ひとりが活躍できる集団、「ワンチーム 古中」を目指してください。」「元氣な挨拶ができる人になってください。」「創造的な活動に積極的にチャレンジする三年間にしてください。」「話しました。新入生代表からは、「この状況に負けず、勉強に運動・行事に精一杯頑張ります。」と、堂々と宣言してくれた姿が昨日のように思い出されます。皆さんと共に過ごした三年間は、まさにコロナウイルス感染症の影響真っ只中で、社会情勢も大きく変化しました。

三年間を振り返ると、一年生の時は分散登校や夏休みの短縮、7時間授業等授業確保のため校外学習などの行事があまりできませんでした。唯一「体育祭」が十月に実施出来、「コロナバージョン」として現在に至っています。ようやく三月に自然文化園に校外学習で行くことが出来ました。その時の皆さんの仄々とグループで散策している姿が印象的でした。二年生になっても、緊急事態宣言の発出や、感染拡大防止対策で「学習発表会」や「職業体験学習」も中止せざるを得ない状況でした。三年生になって、ようやくクラブの大会や発表会が感染症対策を施しながらも実施出来、徐々に日常が戻ってきました。「修学旅行」はまだ様々な規制がかかった中での実施でしたが、自然の中で思いっきり童心に帰って楽しんでる姿や、「全体レク」でようやく仲間との繋がりが実感できた喜びに浸っている様子が印象的でした。そして、三年ぶりの開催となった「学習発表会」での演劇は、学年単位での実施でしたが、皆さんのエネルギー、クオリティの高さに感心しどうしてでした。体育祭でも、最後の「古中ソラン」は五十一年目の新たな古中に相応しい演技でした。この様に限られた行事でしたが、皆さんの弾けるような笑顔が、今でも瞼に浮かび上がります。学習面も、三月に入ってからでも、最後まで全員が落ち着いて学習に集中していました。当たり前のことを当然のようにしている姿を見て、「質の高い集団」に育ってくれたと強く感じました。

この様に話は尽きませんが、皆さんにお話しできるのも、名残惜しいですが今日が最後です。この最後の機会に、餞の言葉を三つ送りたいと思います。

一つめは、「ネバー ツー レイト」という言葉です。

この言葉は、四十一歳になった今も日本プロバスケットボール、宇都宮ブレックスでキャプテンとして活躍されている田臥勇太選手が、二〇〇四年にアメリカのプロバスケットボールに挑戦するため、渡米する際のテレビインタビューでの言葉です。直訳すれば「決して遅すぎることはない」ですが、その時は、「チャンスはいつでもある」と話されていました。アメリカでは、二メートルを超える選手の中で百七十三センチの田臥選手は圧倒的に不利な状況ですが、「背の低さが逆にチャンスかもしれないし、いつチャンスがあるかもわからない。だから、常に準備をしておき、チャンスに備える。」と考え、実際日本人初のNBAプレイヤーになりました。

皆さんは、今後我々大人が経験したことのない、正解のない問に正対しながら生きていきます。「労働環境の急変、グローバル化・多極化の波の到来により、世の中の流れは今までよりもはるかに早く、将来は職業の在り方も様変わりしている可能性が高い。」と文科科学省は予測しています。また、高度情報化社会・Society 5.0社会に向けた人材育成など、知識・理解中心から思考力・判断力・表現力が益々重視されていきます。こ



う言うのと前途多難感が強くなるのですが、皆さんには「無限の可能性と創造力」があります。このような時代だからこそ、自分の可能性を信じ、チャンスは必ず訪れると信じ、前を向いて歩いて、チャンスが来た時に備えてほしいと願っています。

二つ目は、『融通無碍（この場合「状況に合わせて、さまざまな視点から臨機応変に対応できる」という意味）に貫き通す。やるのは自分。正解が何かは、自分で決める。』です。

これも田臥勇太選手のインタビューからの引用ですが、能代工業高校時代の田臥選手は、今でいう異次元のプレイヤーでした。NBAへ挑戦する時も、「日本でやっていけば」という言い方をして下さる方もおられたそうですが、「うまくいくかどうかは全然わからないし、もちろん結果を恐れるときもあった。しかし、最終的にやらないことの方が一番後悔をする。」と思ったそうです。「だったらやってみて、ダメならダメでまた次の一歩だったり、次の扉を開いてみればまた違う世界が広がるのではないかな。」という思いでNBA挑戦したそうです。つまり、「何かに挑戦する時、正解が何なのかは誰にもわからない。それぞれの人が決めることだ。」と話しておられました。

この時に大切なのが、「人とつながる力」と「レジリエンス力」（しなやかさ）だと考えます。

皆さんはこの古江台中学校で行事や総合的な学習の時間で「人とつながる力」を培い、実践してきました。何か迷いや悩みがあるときは、近くで支えてくれる「親」「兄弟」「友達」「先輩」そして「先生方」に相談してください。困ったときに周りを頼ることは、決して恥ずかしい事ではありません。また、以前話したことがあります、「レジリエンス力」も大切です。一回の失敗に挫けることなく、何度も形を変えながら、チャレンジし続けてください。

三つ目は、「感謝とお礼」です。

人は一人では生きていきません。人と人の関わりの中で生きています。当たり前に過ごしている毎日ですが、多くの人に支えてもらっていることは、皆さん十分承知し、「感謝」していると思います。そのなかで、身近な人ほどお礼の言葉は言いにくいと思いますが、「ありがとう」との一言を言うことでその場の空気が和みます。是非実践してください。

以上、私が話した三つのことのうち一つでも、これからの皆さんの人生で役立った嬉しく思います。万一迷いや、困ったことがあればこの古江台中学校を訪れて、仲間とともに過ごした三年間を思い出してください。きっと解決に向けてのヒントがあるはず

です。

さて、保護者の皆様、お子さまのご卒業、本当におめでとうございます。至らぬ点多々あったかと思いますが、この三年間、担任・学年教員をはじめ教職員一同、精一杯努力してまいりました。特にこの三年間は、「感染拡大防止対策」として我慢を強いる形になり、生徒たちにとってもストレスの連続だったと思います。しかしながら、子どもたちはよくルールを守って、頑張ってくれました。この間、保護者の皆様からいただきました、本校教育活動に対するご理解・ご協力に、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございます。

最後になりましたが、公私何かとご多忙の中、ご臨席賜りましたご来賓の皆様、高いところからではございますが、厚くお礼を申し上げます。これからも、地域において、卒業生の成長を温かく見守っていただけたいと存じます。今後とも、本校教育活動の推進に、一層のご支援・ご協力をお願いいたします。

さあ、巣立っていく皆さん！皆さん一人一人が人生の主人公です。無限の可能性へ、自分自身に期待を持ち、大きく第一歩を踏み出してください。皆さんの限らない成長と今後の活躍を願って、私の贈る言葉とい



令和五年三月十四日

吹田市立古江台中学校

校長 森田 直樹